

〈書 評〉

根井雅弘 『経済を読む—ケネーからピケティまで』

(日本経済評論社, 2015年10月21日)

塚 本 恭 章

Masahiro Nei , Reading the Economy
—From Quesnay to Piketty

Tsukamoto, Yasuaki

著者・根井雅弘氏の原著『時代を読む—経済学者の本棚』(NTT出版, 2011年)の1つの続編ともみなしうる本書は, 「名著を読む」「現在の世界を読む」そして「歴史と音楽を読む」の計Ⅲ部構成からなり, 氏の専門分野である経済思想史・現代経済学史研究にもとづく知見や洞察をよりよく知りうる作品である。経済学史家ら専門的研究者はもちろん, ぜひ多くの学部学生にも本書を推奨したい。経済学とはどのような学問なのか, その歴史的経緯や時代背景, 経済思想・理論の多様性と現代的意義, 新たな可能性など「本質」的理解を促す一助となるのではなかろうか。

とくにそれは, 本書が現代の経済社会の直面する多様で複雑な問題群への解答(ないしは解決)を提示しているからではなく, 経済学(教育)の現状をふくめ, むしろそのような問題群の所在を明快に指摘する問題提起の書でもあるからであろう。イエレンFRB議長やノーベル賞経済学者スティグリッツらの動向, 『21世紀の資本』で格差再拡大や不平等問題をあらためて論じ直し世界的に一躍著名となったフランス人経済学者トマ・ピケティについて

の「時事」問題を扱った第Ⅱ部は、興味深い重要な諸論点が、取り上げられる人物の最新情報とともに平易に語られている¹。いうまでなく「時事」問題はリアルタイムで動いていくため、最新の公開情報と話題の収集にはインターネットの積極的活用が欠かせない。社会科学としての経済学をめぐる著者の問題関心と研究の守備範囲の広さを実感させてくれる（本書副題の「ケネーからピケティまで」は、著者の師である故・菱山泉氏の『ケネーからスラッファへ』を直ちに想起させるが、この点については本書で言及があるように、経済科学の創始者をアダム・スミスというよりはピケティと同じくフランス人のフランソワ・ケネーに見出すことに主に起因する）。

ケインズからハイエクまで計17人の経済学者の思想と理論を限られた分量で道案内した第Ⅰ部（著者のいう「アカデミック・エッセイ」の原点）のほうが質的水準は高いといえるかもしれない。ただその1つ1つが凝縮された経済学史講義のような趣を有し、その手捌きは見事である。

冒頭の「古典を読む」において、古典の「効用」や「現代的意義」ばかりに注目する功利主義的な学問理解に異議を唱えながら、著者はこれまでのみずからの経済学の古典研究をめぐる問題意識について、「その古典が支配していた時代における『正統』と『異端』の対立、『正統』から『異端』への転向、そのような問題に関心があったからだと答えるほかない」（4頁、以下本書の頁数）と回想する。そしてスミスやケインズら偉人の学説が、それぞれ「見えざる手」や「自由放任」、「ニューディール」「公共投資」といっ

¹ 日本における不平等や経済格差の問題を先駆的に取り上げた論者として橋木俊詔氏がよく知られているが（本書でも148頁にてこの点への指摘がある）、橋木氏のピケティ『21世紀の資本』に対するより詳しい評価は、『現代思想』（青土社、2015年1月臨時増刊号）での〈ピケティ特集号〉所収の論稿を参照。とくに印象深いのは、本書が世界的ベストセラーになり、格差・不平等問題が大きく再燃する重大な契機になったことを高く評価し強く歓迎する一方で、当該論稿で橋木氏が次のように述べていることである。「それにしても残念なのは、現今ではフランス語だけの出版であれば本書はこれほどの世界的な注目は浴びなかったかもしれない。英語が学術、文化、社会、経済を独占している状態が浮き彫りになったことである。過去においては、ケネーやワルラスなどによるフランス語の経済書を英米人を含めた世界の人は読んでいたのであるが、今では英語本が出てから読まれる時代なのである」（同上書、79頁）。

た一見分かり易いキーワードのみによって論じられる傾向ないしは偏向の問題性を指摘し、「テキストの文脈を追っていけば、誤解の多くは避けられるように思われる。現代にも通じる意義は、その正確な理解のあとに登場するのが順番というべきだ」（7頁）と喝破する。的を射た正確な指摘であり、経済学の古典とそのテキスト・クリティークをふまえた経済学史研究のまさに基本精神を端的に表明するものとして傾聴に値する。

17人の学説を古典派・新古典派やマルクス派、ケインズ学派、オーストリア学派、制度学派など「学派」的に分類し、経済学説の（学派内における）批判的・発展的継承関係にもとづいて経済思想史を読み解いていくことはきわめて一般的な方法ではあるが、時代背景を念頭に置きながら、たとえば「市場」概念を現代の主流派ミクロ経済学的に「均衡」論的に捉えるのか、ケネーやスラッファ的に「循環」や「再生産」といった観点から捉えるのか、ハイエク的に「過程」や「(自生的)秩序」として捉えるのか、またその理論的な含みは何かというようないわば経済学批判の姿勢から問い直すこともまた可能であり、このような論議は「経済学の歴史」とあわせ「経済学の現在」のあり方や「経済学の未来」をも見据える、よき反省的契機となるのではないか²。塩沢由典氏がかつて説いたように、経済学が同時に「経済学批判」であるのは、市場や貨幣・所有といった概念は、経済学が対象を分析する手段であるとともに、資本主義市場社会に作用する観念として、経済学それ自体の分析対象でもあるという事情に依っているからである（塩沢由典『数理経済学の基礎』朝倉書店、1981年）。「均衡」論的な市場像（市場メカニズム）が経済思想史における唯一の学説ではない。本書にはケネーの遺した『経済表』によって、「経済学史上はじめて経済システムの存続可能性が、個々の

² 伊藤誠『経済学からなにを学ぶか—その500年の歩み』（平凡社新書、2015年）は、重商主義、重農学派、古典派経済学、歴史学派・制度派経済学、新古典派経済学そしてマルクス経済学という競合しあう6つの「学派」ないしは「経済学」別に経済学の歩みを系統的に論じ直した作品だが、ここで述べられたような「経済学批判」の観点から読むこともできるだろう。本書への書評（塚本、2015年）も参照されたい。

経済主体の意思や思惑とは独立に、客観的な法則として提示されたからである。このような視点は、古典派やマルクスを経て現代のピエロ・スラッファにまで受け継がれていく」(47頁)とある。市場や貨幣・所有に限らず、「競争」「利潤」「資本」ないしは「自由」「平等」「正義」といった諸概念も同様であろう。学派内はもちろん、単なる学派間での比較検討にとどまらない相互批判を通じた「共創」的深化の営為がぜひとも必要だ。

サムエルソンやジョーン・ロビンソン、ヒックス、ロイ・ハロッド、スラッファ、ガルブレイスそしてミュルダールらは、おそらく「通常の」経済学史講義では本来扱われることが決して多くない人物だと思われるが、「正統」と「異端」、それらの理論的・思想的関連を明示的に扱いうることは、著者のいう「経済思想の多様性」論を尊重する立場からも意義深い。しかしだからといって、「最近の経済学教育論争を考える」という文章で率直に述べられるように、日本学術会議のいわゆる参照基準が謳う「標準的アプローチ」の役割を決して否定するわけではないのであり、著者はそれを「しっかり学んだ上で、批判的検討へ移るべきである」(128頁)と釘を刺す。なぜならば、「マルクスにせよケインズにせよ、彼らが生きた時代の主流派経済学を徹底的に学び、その根源的批判から『新しい経済学』を構想したことを忘れてはならないと思う」(129頁)からである。経済学教育をめぐる「多元的アプローチ」を「標準的アプローチ」と排他的にみなすべきではない³。これもまた的を射たきわめて重要な指摘であろう。

ふりかえってみれば、ジョーン・ロビンソンの有名な「経済学の第二の危

³ この点に関連するものとして柴垣和夫氏の書評(2015)も一読されたい。氏が書評しているのは経済理論学会、経済学史学会、進化経済学会や経済教育学会、基礎経済科学研究所など10を超える諸学会からの日本学術会議〈参照基準〉への批判的見解について、諸学会をいわば代表する諸氏の論稿を所収した書である。柴垣氏は多様な経済学のアプローチの有用性を認め「根本的に必要なは」と続け、「多元的な教育課程を編成」し「複数の理論体系を対抗的に教えること」にもとづいて、学生に「複数のパラダイムの競合を経験させること」の重要性を説いている。評者もこの指摘にまったく同意する。著者の根井氏と橋木氏との対談集(人文書院、2014年)もあわせて参照せよ。

機」宣言（1971年12月）について、「ジョン・ロビンソンがここで第二の危機と呼んでいるのは、彼女の生涯を通じての第二の危機であり、それはそのまま二十世紀における経済学の危機を意味する」と総括したのは、ロビンソンと交流が深かった故・宇沢弘文氏だが（宇沢，2014年）⁴，社会科学としての経済学のあり方と行方が従来以上に再考されねばならない時機を迎えているのは確かであり，経済学教育ひいては経済学史教育の立ち位置を明確に指示しうる著者の言葉は概して示唆に富む。「正統派」（主流派）経済学に精通しその内在的批判を積極的に推し進めた「異端派」としての宇沢やロビンソンら巨星の遺産を今どのように汲み取り活かしようか。「正統と異端のせめぎあい」という根井氏の問題意識は輝きを増している。

かつて猪木武徳氏はその著『文芸にあらわれた日本の近代—社会科学と文学のあいだ』（有斐閣，2004年）において、「文学と経済（史）研究双方が互いに相補うことによって，歴史的存在としての経済社会をより強く実感できるのではなかろうか」と述べていた。「経済を読む」という表題を掲げる本書の第Ⅲ部に「歴史」や「音楽」関係の書物への書評も所収されているのは，猪木氏のそうした問題意識と共鳴し合うに違いない。「深読み」という言葉があるように，「読む」という人間の主体的営為は，経済・社会現象や物事の深部に潜む基本構造や原理・メカニズム，それらを生み支える価値観やイデオロギー，倫理といった日常生活のなかで直ちには把握しえない諸動因とその有機的連関（対立や衝突など）を「洞察する」ということでもある。「読む」とは決して簡単な行為ではない。そのためにこそ，「問題関心」「学

⁴ その後、『現代思想』（青土社，2015年3月臨時増刊号）において宇沢弘文についての総特集が編纂された。内橋克人氏と神野直彦氏による「討議：宇沢弘文の思想と仕事」では，宇沢を師とする岩井克人氏の追悼文（日本経済新聞朝刊2014年9月29日「経済教室」掲載）の理解の仕方をめぐる意見交換をふくめ，後年の「社会的共通資本」論の位置づけやその現代的意義など深い議論がおこなわれている。「近代経済学とマルクス経済学を超え，制度主義の経済学を継承・発展させて，現在の迷宮から抜け出す道案内となる経済学を，宇沢先生は構想したかったのだと思います」（同上書，36頁）という神野氏の見解は，21世紀の経済学の課題そのものを示している。

術関心」というもの、そしてそれを「信じる」という主体的精神が決定的な意味と役割を担うことになるのではないか。「あとがき」で手短に綴られているように、本書は日本語や書物そのものへの著者の並々ならぬこだわりが一貫して刻み込まれており、本作『経済を読む』が前作『時代を読む』とあわせて、経済学者を超えた幅広い読者を獲得することを期待したい。

参考文献

- 猪木武徳『文芸にあらわれた日本の近代—社会科学と文学のあいだ』
(有斐閣, 2004年)
- 宇沢弘文『経済と人間の旅』(日本経済新聞出版社, 2014年)
- 柴垣和夫「書評 八木紀一郎(代表)編他『経済学と経済教育の未来—日本学術会議<参照基準>を超えて』(桜井書店, 2015年)」
『季論 21』30号記念増大号所収, 2015年10月20日, 本の泉社
- 橋木俊詔・根井雅弘『来るべき経済学のために』(人文書院, 2014年)
- 塚本恭章「書評 伊藤誠『経済学からなにを学ぶか—その500年の歩み』
(平凡社新書, 2015年)」『変革のアソシエ』季刊 No. 21, 2015年7月30日,
社会評論社
- 根井雅弘『時代を読む—経済学者の本棚』(NTT出版, 2011年)
- 菱山泉『ケネーからスラッファへ—忘れえぬ経済学者たち』
(名古屋大学出版会, 1990年)